
ドクゲモロジック

笹ヶ根伊都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドクゲモロジック

【Nコード】

N6786G

【作者名】

笹ヶ根伊都

【あらすじ】

月の夜、馬車道に現れた美貌の男女は処刑人だった。

ある夜、街の片隅にて

1)

貴方のために、爪を磨いて赤い色を乗せたわ。

黒い衣装も新調したの。

髪を結わなかったのは貴方の好みだから。

よく理解している。

あなたのこと。

あらあら。おかしいぐらい真剣にあなたが駆けて行く。

何度転んでも、その足は止まらない。

どこへ逃げようというのかしら。

ふふ。ほら、また転んだ。

仕方ないわね。その若柳のような容姿で女性をとりこにする貴方で
すもの。

囁きは得意でも、運動は苦手なのね。

大目に見てあげる。

豪華なお仕着せは身動きを封じるっていことに、今このときになつて初めて気がつくなんて。

残念なおつむりですこと。

Latro 『傭兵』のように。

dectus そつと賣方のことを『咬む』わ。

macctance 『賞賛』などいらぬ。

ただ、決して獲物を逃がさない。

これが Latro dectus macctance (わたし) (黒後家蜘蛛) の哲学。

男は悲鳴を上げた。

したたかにぶつけた膝も悲鳴を上げていたが、それをこらえて後ろを振り返った。

扉の開いた馬車はぼつんと月光を浴びて、主を失った悲しみを嘆いている。

そして、まさに起きていることが現実だと告げている。

つややかな女のしのび笑いが耳朶を撫でて、ぞくりと首筋に怖気がはしる。

そうだとも。逃げなくては。

酒気を帯び、ままならぬ足をいらだたく思いながら、どうにか立ち上がる。

一歩踏み出そうとして男は悲鳴を上げた。

転んだついでに足を挫いたようだ。

舌打ちをして、壁に手をつく。

こうして壁伝いで進んでいては、追いつかれてしまう。

早く、少しでも早く人気のある通りにでて助けを求めなくては。

早く気持ちは裏腹に一向に足が進まない。

このようならぶれた場所、縁もゆかりもない。

さっぱり路地の構造がわからないではないか。

どうしてこうなった。

最近自分に熱を上げている女の家から戻る途中のことだった。

馬の大きないななきの後、辻馬車が急に止まった。

御者に悪態をつくが、全く返答がない。動き出す気配もない。

不審に思つて馬車を降りると首に吹き矢を撃たれた御者が仰け反つ

て気を失っていた。

そうして、今逃げている。

物思いに沈んでいる場合はなかった。

角を曲がった先は、絶望的な行き止まり。

あわててきびすを返すと、ちょうど8歩ばかり離れたところに、長

身の男の影。

その金髪をつややかに照らし出しているのは今夜の満月。

それが、ゆっくり一歩踏み出した。

逆光のせいで見えなかった男の顔が、青白い照り返しで少しずつ明

らかになる。

品良くとがった顎。細心の注意をはらつて仕上げた彫刻のような鼻

筋。

極めつけが、造形の神の置き土産といわんばかりの瞳。

こちらを見据える二つの澄んだ青はそれ自体が光を放っているかの

ように、はつきりと輝いていた。

端正な顔にあつて、軽くひそめた眉はどこか退廃的な香り。

「稀代の色男の顔を拝みに来ては見たが、何のことはない。私の方

が格上だな」

薄く笑つた唇の傲慢さよ。

後ずさりかけて、男は悲鳴を上げた。

そのまま、耐え切れずうづくまる。

「どうした、立てないのか。手を貸してやろうか？」

申し出とは裏腹に、害意ある微笑みを浮かべて男が間合いを狭めてきた。

本能的に手を後ろに這わせて、無様に尻をこすりながら後ずさる。

「往生際がよろしいこと。ジュール・マツディリア。覚悟はできて？」

おのが本名を呼んだのは、しつとりと濡れた薔薇の花びらのようなつややかな声。

夜の空気が甘い香りに満たされる。

「何故、私の名を・・・」

いつの間にか、行き止まりのはずのその場所に黒衣の女が立っていた。

前の男に負けず劣らず完璧な造形。

緩やかにカーブを描いて肩から腰まで垂れた髪は暗い色で、濡れたように艶やかな色。

揃いの瞳に宿っているのは強い意志と聡明さ。

白磁の肌は夜目にも隠しようがない。

完璧な美貌に文句のつけようのない気品。

そこに程よいアンバランスを添えるのは、その紅いくっきりとした唇。

「貴方のことなら、なんでも知ってるわ。懺悔の時間に遅れるなんて、悪い子」

そう言って、女は踏み出した。

「エリザベス、メアリ、ロザンヌ、イメリア、イザベル・・・。いかが？」

思わず体が震えた。

この二人は何者だ。金で雇われた殺し屋なのか？

「君が、凋落した令嬢達だ」

男の冷たい声が上がら降りてくる。

「『婦女の品行悪きは、家名の恥』とは、よく言ったもの。口止め料を脅し取り、今度は許婚の家へ。そこでも強請りを働くななんて、いかななものかしら」

「親からも、婚家からも冷遇されて、令嬢達のうち何人かは命を絶った。何か言い分は？」

男がからかうように言うが、喉まで渴きがひりつき声もでない。

「どうしたの？怖いのか？震えてるのね？でも、だめよ。貴族は家名に傷がつくのを恐れる。公に訴え出られないのをいいことに、随分と荒稼ぎしたようね」

何もかも、お見通し。

「さて、か・・・金でやとわれたんだらう。金なら雇った奴の倍、出す。だから、助けてくれ・・・」

「だ・め」

むなしい叫びを、女が無言の微笑みで一蹴。

男は愉しむように言う。

「私たちの雇い主は、国一番のお金持ちでね」
聞いたことがある。

国王陛下は公には出せない爪を持っていると。

「何か、付け加えることはあるかね？遺言があるなら聞こう。私は、今宵『証人』だから」

男が低く笑う。

「無ければ」

女が影をたたえて告げた。

「『執行人』の務めを果たさせていただくわ。さあ、お祈りは済んで？」

恐怖で胸が満たされる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6786g/>

ドクゲモロジック

2010年10月9日00時40分発行